



テーマ ユーラシアの静かなダイナミズムと海の日本 (要旨)

西谷 公明

エコノミスト、(株)国際経済研究所非常勤フェロー

静かなダイナミズム — ユーラシア地政学の大転換

記そうとするのは、冷戦終焉後の四半世紀に、このユーラシアの地平で進行している静かな変化についての考察である。それは海の日本で生きる私たちが視界に入れておくべき地政学上の重大な要件でもある。中国は戦後70年を経て、いまや揺るぎもしいグローバル・パワーに変貌した。

この20年の変化の大きさをこれから20年先の将来まで引き延ばすと、世界の構図はいまとは大きく変わる。それがくっきりと現れるキャンバスがユーラシアである。

「一帯一路」の源流

「上海協力機構」SCOは、1996年4月に立ち上げた首脳サミット「上海ファイブ」を「上海協力機構」として常設化し、2001年6月、中国が中心となり、ロシアと中央アジアの4カ国(永世中立国のトルクメニスタンを除く)を原加盟国として創設した。

いま中国が進めているシルクロード経済ベルト構想(「一帯一路」イニシアティブの陸上パート)は、SCOの創設、活動とともに始まった民族や宗教の垣根を越えてさまざまな地域協力について、幅ひろく協議するためのプラットフォームである。

中国にとり西域は長く文化のことなる異郷であり、中華の安寧をおびやかす辺境。「一帯一路」の源流というべきものは、ソ連崩壊後における新疆ウイグル自治区の統治と、トルコ人が多く住む中央アジアの開発、治安や民生の安定化にあった。

大陸国家の視界

中国によるユーラシアにおけるインフラ建設は、まず中央アジアから中国へ原油や天然ガスを輸送するパイプラインが2005年12月と2009年12月に完工。東の沿海部から西の内陸のカザフスタン国境までつづく高速ハイウェイが開通したのは2011年。2019年にはカザフスタン領内のそれがほぼ全線開通した。

中国-欧州間の鉄道による越境型の一貫貨物輸送「中欧班列」は、2009年8月に中国とカザフスタンやロシア、ポーランド、ドイツなどの鉄道当局にドイツのシーメンス社が加わって2011年3月、中国の重慶とドイツのデュイスブルクを直行で結ぶ「愈新欧」重慶-新疆-欧州線として実現した。中国の構想「一帯一路」は、中国に軸足をおいて大陸の広がりを見据える必要がある。

ユーラシアにおける中国

中国は、最初の統一王朝だった秦の時代から、古代シルクロードで栄えた国、西の内陸へ向かって広がる大陸国家。古代の秦王朝からはじまる2千数百年來の中国の歴史の現在にユーラシアのいまはある。いくつかの長い混乱期をあいだに挟んで漢、唐、清の時代へと過去に3回、西進の大き

な波が起こっている。

ソ連崩壊後の 1991 年末、中国は内陸ユーラシアの開発にのりだし、新疆ウイグル自治区の安寧と、1980 年代の改革開放政策とともに、いまでは西の内陸部の工業都市へとひろがる巨大な経済の外延的な発展をめざした。

ロシアの生きる道

ユーラシアにおける中国について考えることは、北の大国ロシアの未来を問うということでもある。ロシアにとり、ユーラシアという領域概念は、国家としての基本スタンスに他ならない。

17 世紀から 20 世紀にかけての 300 年間、膨張するロマノフ朝ロシア（1613 年～1917 年）と東に清朝中国（1616 年～1911 年）、ふたつの帝国がユーラシアに並存した。

共に 17 世紀はじめに興って、20 世紀はじめに革命によって滅びたが、今、強大化する中国との対比において、ロシアは生きる道を問われている。

経済力のちがいはもはや競いようがない。ロシアの GDP は中国の 8 分の 1 以下。ロシアにとって中国は、経済の屋台骨をなす石油と天然ガスの最重要な買い手。エネルギー資源を中心に経済の相互依存をいっそう深めながら、相互に補完しあっていく。ロシアの基軸は中国との連携にある。ロシアは中国と争わない。

ロシアと中国の関係は、通常の貿易から石油・ガス、次世代通信、軍事分野での協力へと拡大し、高次化。中ロ両国は、すでに東アジアにおける共同防衛体制への一歩として共同パトロールを実施。今後、両国の軍事協力が東アジアを広くカバーする可能性もある。

ユーラシアにおける中ロの連携は、中国がロシアを抱き込み、ロシアがそれに乗る形でいっそう深化していく。

大陸国家の系譜

大英帝国によるインド統治は 19 世紀半ばにはじまったが、それ以前のインドは長い間、北から及んだ陸伝いの流れを引いていた。ムガル帝国（1526 年～1858 年）のムガルとはモンゴルを意味する。現代インドは海洋国家と見られているが、歴史的には大陸国家の系譜にある。ユーラシアの地肌のひとつと言える。

インドは、アジア・インフラ投資銀行（AIIB）には中国に次ぐ第二の出資国として創設時から参画し、AIIB にはインド財務省から副総裁が就任。国内の遅れたインフラ開発に必要な資金を中国に期待している。中国はいまでは最大の貿易相手国。

スマートフォンの巨大市場に中国ブランドが占めるシェアは 50% 超。モバイル通信を支える携帯電話の基地局のほとんどが中国企業によって設営されている。ファーウェイ社（華為技術）は南部の高原都市バンガロールに国外で最大規模の R&D センターを開設。

大陸からの風と向き合う

ユーラシアの重心は、北のロシアから東の中国へ移動し、大陸は、中国を回転軸として、いまでは南のインドを巻き込んで大きく旋回しようとしている。ユーラシアにおける中国とロシア、そこにインドの発展という新たな可能性が交錯しつつあるユーラシア・ダイナミズムの核心である。

まだはじまったばかりのユーラシアを舞台にした壮大な変化、日本はどう向き合うべきか。

日本は陸と海の対立を軸にした狭隘な考えを戒め、アメリカとの同盟関係に依拠しながらも、ひろくユーラシアの国々から敬愛される開かれた存在でなければならない。

中国との互惠の関係をあたためつつ、近隣のアジアの国々だけでなく、インドやロシアなどユー

ロシアの国々との交流をいっそう活発にし、世代を越えて相互理解を深め、積み重ねていくことが不可欠である。

日本外務省が中央アジア（トルキスタンを除く4カ国）で行った世論調査の結果は、中央アジアの人々が遠い日本に寄せる信頼と期待の大きさを示す。

Q：「もっとも信頼できる国は次のうちどれですか？（複数回答）」

A：ロシア61%、日本11%、中国5%。

Q：重要なパートナーは次の国のうちどれですか？（複数回答）」

A：ロシア75%、中国49%、日本25%。

日本は信頼できる重要なパートナーとして期待されている。私たちは、こういう国々をさらに大切にしなければならない。

<了>

詳しくは本文 <https://bit.ly/2THpcgP> をご覧ください。

執筆者紹介

西谷 公明（にしたにともあき）

1953年 生まれ。

1984年 早稲田大学大学院経済学研究科博士前期課程修了。

1987年 (株)長銀総合研究所入社。ウクライナ日本大使館専門調査員を経て、

1999年 トヨタ自動車(株)入社。
ロシアトヨタ社長、BR ロシア室長、海外渉外部主査などを歴任。

2012年 (株)国際経済研究所取締役・理事。同シニア・フェローを経て、2018年独立。

現在 エコノミスト、(公社)N&Rアソシエイツ代表。(株)国際経済研究所非常勤フェロー。

主 著 『通貨誕生ーウクライナ独立を賭けた闘い』都市出版、1994年。

『ユーラシア・ダイナミズムー大陸の胎動を読み解く地政学』ミネルヴァ書房、2019年。

公式HP <https://n-relations.com/>



モスクワ、スコルコヴォ研究開発特区にて

当財団では、第一線で活動される気鋭の執筆者に依頼し、時代を拓く提案、提言をニュースレターとして発信しています。ご意見をおよせください。

財団事務局 abrighterfuture@theoutlook-foundation.org

一般財団法人 未来を創る財団：<http://www.theoutlook-foundation.org/>

© 2020 The Outlook Foundation. All rights reserved.